

定例研究会要旨

日時：平成 29（2017）年 11 月 29 日 17:30～19:30

会場：東京外国語大学 語学研究所

「ドロミテ・ラディン語における小辞 *pa* の文法化：コーパスを用いた通時的分析」

‘La grammaticalizzazione della particella *pa* in ladino dolomitico: un’analisi diacronica basata sul corpus’

発表者：土肥 篤（東京外国語大学・トレント大学（共同学位）大学院博士後期課程 / イタリア語学,
レト・ロマンス語学）

DOHI Atsushi

ドロミテ・ラディン語はイタリア北東部トレンティーノ＝アルト・アディジェ州およびヴェネト州で話される言語である。少数言語であるが、少なくとも五つの方言（ガルデーナ方言、バディーア方言、ファッサ方言、リヴィナッロンゴ方言、アンペッツォ方言）に分かれている。

この言語においては、ラテン語 *POST* を語源とする *pa* という語が次のように方言によって大きく異なる用法をもっている。

a) リヴィナッロンゴ方言、アンペッツォ方言

Pa が文に対して話者の心的態度に関する情報を付け加える、いわゆる心態詞 *modal particle* として機能する。

b) ファッサ方言

Pa が心態詞としての用法を持っているが、さらに疑問文において特殊な用法を手に入れている。全体疑問文（以下、簡便のため *Yes/no* 疑問文と表記）では心態詞として用いられるのに対し、部分疑問文（以下、*Wh* 疑問文）では話し手が任意で付加し、その有無が意味の差異を伴わない。

c) バディーア方言

ファッサ方言と同じく *Yes/no* 疑問文では *pa* が心態詞として機能する。これに対し *Wh* 疑問文では *pa* が義務的に付加され、疑問文が純粹に情報を求めるための文（以下、このような文を無標の疑問文とする）として解釈されるために必須の要素となっている。*Pa* の欠けた *Wh* 疑問文では、疑問詞が強調される（以下、単に情報を求めるためでない疑問文において発生する語用論上の効果の区分には立ち入らず、無標でない疑問文一般を有標の疑問文と呼ぶ）。

d) ガルデーナ方言

Yes/no 疑問文と *Wh* 疑問文の双方において、無標の疑問文としての解釈のために *pa* が必須の要素である。ただし、*Yes/no* 疑問文では *pa* が欠けると非文になるのに対し、*Wh* 疑問文では有標になるに留まる。

Hack (2014) によれば、これら四種類の用法は Abraham (1991) の提唱する心態詞の文法化モデルの延長を示唆している。すなわち、ラテン語 *POST* が表していたような語彙上の意味（「後ろ（で）」）から始まった *pa* の変化が、意味の拡大（「その後」、「だから」）ののち語彙上の意味を喪失して心態詞的な用法（話者の心的態度の表明）を獲得し、さらにその用法をも失ってまず *Wh* 疑問文のマーカ―に、さらに疑問文一般のマーカ―になる、という仮説である。これに従えば、ドロミテ・ラディン語の各方言はこのプロセスにおいてそれぞれ異なる段階にあるということになる。

(1) 小辞 *pa* の文法化 (Hack 2014)

Localistic > temporal > logical

> illocutive / discourse functional

リヴィナッロンゴ・アンペッツォ方言・ファッサ方言

> wh-question marker

バディーア方言

> general question marker

ガルデーナ方言

しかし発表者がオンライン公開されている文語コーパスを用いて行った調査では、pa の用法の変化は実際にはより複雑な過程を経ていることがわかった。

調査はファッサ方言・バディーア方言・ガルデーナ方言の三つを対象とした。また具体的には、疑問文で pa が用いられる頻度、およびこれらの疑問文が有標のものであるか否かについて調べた。前者は pa が文法マーカーになる、すなわち義務的に用いられるようになっていったのか、後者は心態詞としての用法が失われていったのかをそれぞれ確かめることがねらいである。さらに、主に 1800 年代と現代の違い、また方言間の違いについて検討した。

この調査から、以下の結果を得た。

- 1) ガルデーナ方言では Wh 疑問文と Yes/no 疑問文の双方で義務性の獲得と心態詞としての用法の喪失が起こった。
- 2) バディーア方言では Wh 疑問文において二つの現象がどちらも起こったのに対し、Yes/no 疑問文ではむしろ pa の使用がより稀になっていく。
- 3) ファッサ方言では Wh 疑問文で心態詞としての用法の喪失が起こったにも関わらず義務性の獲得が発生しなかった。Yes/no 疑問文ではバディーア方言同様に pa の使用が稀になっていく。

この調査結果から、本発表では次のように結論づけた。

- ・ Wh 疑問文では一般的に、小辞 pa が心態詞から無標の疑問文マーカーになっていくような文法化の傾向がみられる。ただしこれは、ファッサ方言には当てはまらない。
- ・ Yes/no 疑問文では方言によって、Wh 疑問文同様のマーカー化と、むしろ使用されなくなっていく変化の二種類がみられる。
- ・ これらのことから、各方言が先行研究の想定するような唯一の文法化モデルにおいてそれぞれ異なる段階にいるとは言えない。